

第22回ことばの祭典

仙台文学館主催の、第22回「ことばの祭典」短歌・俳句・川柳へのいざないが6月22日開かれた。

応募作品数は、短歌部門85点、俳句部門90点、川柳部門85点が寄せられた。吟行会の課題は「鏡」または「記す」。

〈ことばの祭典賞〉

◇短歌の部
二十人の集落あとも荒れ果てて我がものがおに鏡ひかりぬ
金野友治

◇俳句の部
瓦礫をたどる魂ひとつ箱眼鏡
平山北舟

◇川柳の部
向かい合い今日の幸せ確かめる 村上龍晃
《小池光館長賞》

◇短歌の部
ありがとうと広告裏に記されしリユーマ
チの母の曲がりたる文字 林静江

◇俳句の部
亡父の日記炭ナイ米ナイ虫干しす
島山みな子

◇川柳の部
鏡には仏頂面のおじいさん 鈴木武志

今年も、友の会サポーターが、裏方スタッフとして参加し、受付での短冊配布、参加者が選ぶおじいさまの賞用の作品貼り出しなど、一日、文学館職員とともに、イベントの裏側を支えました。

私と郷土と文学 ⑬

信州に住む友人から教えられ、つい最近読み終えた本は葉室麟の『蝶のゆくへ』。星りょうを軸として透谷や藤村、独歩など近代文学史に名を残す小説家たちの青春と煩悶が描かれています。のちに相馬黒光となって新宿中村屋を切り盛りする女性の生涯は、黒い蝶に導かれるように明治大正昭和を駆け抜けていきました。

朝の連続ドラマに登場してほしいのは相馬黒光だよね、と仲間たちとの読書会で話題になることもたびたび。今回の「なつぞら」は連ドラ1000作目とあってか、俳優陣も豪華で北海道ロケの大自然も美しい。NHKがいつも以上に力を入れてると楽しく見ていたところ、東京編になったら新宿のカレー屋さんの川村屋が舞台に。黒光の孫を思わせるマダムの名前は光子さん！

あ、まあ、と今後の展開が気になり

「なつぞら」のモデルは仙台出身!

サイトを開いたら主人公奥原なつ（広瀬すず）は草創期のアニメーションで活躍したモデルがいたと書いてあります。奥山玲子さんと名前も記してあり、仙台市生まれ、宮城学院中高出身とあるではありませんか。

早速宮城学院の資料室に問い合わせたところ、関係者から連絡が入っていたとみえ、写真や友人からの証言をもとにしたプリントをいただきました。惜しくも12年前に亡くなられていますが、タカラジェンヌのようにお洒落でスタイルがよく、勉強もトップクラスで東北大に進学したとか。朝のドラマをさらに身近に感じつつ、宮城出身の輝く女性の存在をうれしく思いました。（渡辺仁子）

「私と郷土と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。



Photo by Ryuji Sasaki

文学館の敷地内につつじが咲いている。みことだよというメールがはいった。花の命は短い、満開期を逃してはならじと即座に出かけた。

門を入ると道沿いに赤紫のつつじがお出迎え。館の東側を通り左側斜面のつつじを見ながら歩くと、タケノコがよきつと立ち上がっていた。それを横目に目的のところまで石の階段を登る。半円のベンチがありそこから見渡した。おとと声が出る。白、ピンク、赤、赤紫、何色ものつつじが咲きみだれていた。空の青さと、つつじの花々と周りの木々の緑が絶妙。群生の花は遠くから見ても美しいがここではやっぱりもつと近くで見たい。下まで行って見上げた。少し離れて枝ぶりのいい太い幹の松がある。昔からつつじを見守っている感じがした。

田東山や徳仙丈山もいけれどこの隠れ家の場所に咲くつつじの花の咲きっぷりに感動する。気づいている人が少ない。思わぬところにある花がまたいい。

(一)

文学の杜

仙台文学館 友の会会報

第60号

令和元年7月30日発行

仙台文学館友の会(仙台文学館内)
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話 022(27)3020
仙台文学館のホームページ
<http://www.sendai-lit.jp/>

文学を共有する喜び

会長 渡辺 祥子

日頃の友の会活動へのご支援に、心から感謝いたします。

新しい時代が幕を開けた今年、仙台文学館の開館20周年と共に、友の会も、発足から20年という大きな節目を迎えました。

文学館開館の準備段階から、地元の文学愛好家の方々を中心に文学館の応援団的組織を作ろうとの気運が盛り上がり、開館と同時に組織されたこと何とおりますが、多くの皆さんの思いで、文学を通して人と人、そして館と人とのつながりがつくられてきたのだと、バトンを引き継ぎ、会長を務めさせて頂きながら常に感じております。

私たちは文学作品を通して自分自身の世界が大きくひらかれる喜びを味わいますが、友の会の活動は、その喜びを他の方々と共有することで、更に深めたり広げたりすることの出来る場になっていると思います。

今年度もこれまで同様、会員の皆さんとの関わりの中で、文学や文学館をよりいっそう楽しめ、味わえる活動をして参りたいと思います。引き続き、どうぞ宜しくお願い致します。

2019年度 文学館友の会総会 キーワードは「20周年」

5月5日10時から、仙台文学館講習室で友の会総会が開かれた。渡辺会長の挨拶の後、2018年度の事業報告、収支決算報告、監査報告、2019年度事業予定案、予算案が出席者全員の拍手を持って承認された。

役員とサポーターの紹介、新副館長赤間亜生さんの紹介・挨拶と続き、総会は滞りなく閉会した。参加者は18名だった。

今年度の総会は「20周年」がキーワードだ。文学散歩は20周年記念企画として、小池光館長に同行と車中でのお話をいただく「小池館長と行く斎藤茂吉記念館」に決定した。そして昨年度20周年に向けての試みとして企画された「友の会文学講座」は「友の会講座」として継続されることになった。その他に「仙台文学館友の会20年のあゆみ」記念展示が行わ

れる。

なお、役員、サポーターは次の顔ぶれ。

▽会長 渡辺祥子▽副会長 寺嶋信▽幹事 一文字ひろみ、尾形光子▽監事 近田裕子、長沼和子▽サポーター 池田ミチ、加藤裕子、坂田久子、佐藤満子、佐野のぶ▽事務局 伊藤美菜子

議事終了後、例年のように出席者が自己紹介を兼ねた「ひとこと」の時間が設けられた。ここでも、自身の20年間の友の会との関係を語られた方が多かった。仕事と会員活動両立の難しさ、新会員の募り方、活動を活発にする方法などの問題提起や提案もあった。

総会終了後、開館20周年記念特別展「井上ひさしの劇列車」を見学した。劇列車に見立てた展示室を、赤間副館長の解説で観覧した。



文友一滴

選歴からはじめたブログは10数年経った。この際ブログや読書記録、レポートなどをまとめてみようと思っただ。本を読んで、その時々に行っていたと思いたい立ち上り人旅をしてきたことも含めて。

内村鑑三の「代表的日本人」新渡戸稲造の「武士道」鈴木大拙の「禪」岡倉天心の「お茶の本」などがある。著者に関連するところをみてまわった。軽井沢、花巻、金沢、鎌倉、東京、北茨城が心に残る。読んだ本と合わせて思いをめぐらす旅だった。そうすることで本の内容の深みが増し、記憶の定着に役立った。

また、美術館や、博物館。記念館や記念堂。彫像や建物や公園、寺、教会、文庫などをみてきた。本を読むことからちよつと行ってみよう。行って見たら著者の周辺はもちろん、行き先の地域をも知ることができた。

そしてわかったことは、すべて明治の時代に活躍した人達であること。日本を紹介し、日本を理解してもらおうため、アメリカで英文の著書を出していた。文学的なことだけではなく教育や宗教、政治、国際的な活動にも圧倒される。そして、英文出版物が逆に日本に入ってきて読まれるようになった。明治の時代の人びとの気概、活躍はすごいものがある。

これらの本はまとめて読んだのではなく以前から読んできた本の中にあつた。今読書記録を遡ることあの時代の人びとのすごさ、意気込みが半端ではないのを感じた。こんな人たちがいたのだと感慨深い。

知識が広がり、次々といろいろなものにつながり、豊かな気分になったはずだが、最近記憶が乏しくなっているのがわびしい。それでも、レポート、写真、ブログに残したものを覗きみて懐かしんでいる。

(一)

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第60号をお届けします。

▽東北歴史博物館のスーパークローン文化財展を見てきた。軽い気持ちで見に行ったのだが、なんのなんの見ごたえ充分。世界のお宝を東京芸大の研究と技術で再現した。今日、物も動物も人までもクローン技術のなせる技に仰天する。ふとカズオ・イシグロの小説「わたしを離さないで」を思い出した。

▽留守中に配達を止めた新聞の再開連絡を忘れて、徒歩10分のコンビニへ買いに行った。ネットでなくテレビやラジオの音でなく活字で知りたい旧世代である。帰り道、急速に減っているという新聞購読数のことを思い、コンビニに買いに行くのが日課になる日がくるかもとの思いが浮かんた。

▽雨の日、歩道に夏椿の花が落ちていた。咲いていたんだ、と声に出さない独り言。そういえば、朴ノ木、ゆりの木、泰山木、今年は花も香りも気付いていなかった。生活が滞りなく繰り返され、日常になるのは何てありがたいことかと痛感した。目的地を目指して歩く時でも、五感くらいは解放しようと思う。

(和)

▽新幹線はひた走り、仙台と東京をわずか1時間半で結ぶ。流れ去る窓外の景色を追いながら思う。この便利さを生み出すのに、どれだけの時間と頭脳と技術と労力が使われたのだろうか。地質調査、ルート決定、住民との交渉、山を削り、橋脚を建て、線路を敷く。今はもう見えていないものに感謝する。

(佐)

友の会随想

平成三十一年元日。井上ひさし没後十年目「どうぶつ会議」四十八年ぶり上演。小さな記事が目につく。...



井上ひさしメモリアル10

会員 小野 津仔

返している人間の悪いおとなたち。「令和」の陰にもうこめいていないか。子どもたちが可哀想だ。...

仲間さの合唱となる。孫達も声を合わせて。初大舞台観劇を井上作品でスタートできた孫たちは幸せである。...

めようとはしなかった。作者の分身と思われる尾田と佐柄木、夜を徹したふたりの会話を通して、生きるというこの姿が見えてくる。...



第40回読書会 系譜の中に生きる 「鹽壺の匙」 車谷長吉

自分を深く掘り下げて行く時、見えてくる出自の系譜。作者はそれを私小説という形の中に克明に書き綴っている。...

返している人間の悪いおとなたち。「令和」の陰にもうこめいていないか。子どもたちが可哀想だ。...

第41回読書会 生と死、葛藤の果ての一夜 「いのちの初夜」 北条民雄

らい病の宣告を受けてから半年、主人公尾田は今、入院すべく病院の敷地の中へと一歩を踏み入れたばかりである。...

ハンセン病が治る病気ではなかった時代に書かれた、いのちに向き合う佳作。若くして世を去った作者の才能が惜しまれる。...

文学散歩20周年記念企画

小池光館長と「斎藤茂吉記念館」を訪ねる旅 沙羅の花に迎えられて



斎藤茂吉記念館前での記念撮影

た。食い意地が張っていて到来物のボンレスハムを独占したとか、夏の入浴後、裸で外のベンチで涼んでいて、入院患者に間違えられたとか、茂吉の人間くさいエピソードに車内は度々笑いに包まれた。...

が並んで展示されている。正岡子規が導入した「写生」と、それを発展させた茂吉、特に「実相観入」という茂吉の歌論という解説が印象に残った。...

にあたって『赤光』(シヤッコウ)を読み直そうと注文した。入荷連絡をくれた店員が「セッコウ」と言ったのは苦笑してしまった。...



茂吉記念館秋葉館長のギャラリートークを聴く会員

をいただいた。蔵王連峰を望み、茂吉が歌に詠んだ姫沙羅が咲く生誕の地で聞くその生涯は格別に心に響いた。...

逆白波のたつまでにおぶくゆふべとなりけりるかもぐらいいしかない出せないが、多面的な茂吉を知ることができた。...

文学散歩、いい企画ですね。文学を、今回は茂吉を間に挟んで、感じたことを語り合い共有できる嬉しさ、という感想につきます。...